

母と二人きりの生活は、心にいつも灰色の、厚く重い雲が垂れたような日々の連続であった。それは、弥一郎が決して望まなかったものである。母は、養子に入った次男のことを誉めちぎり、弥一郎の扶持の少なさを、甲斐性のなさの表れだ、と口汚く責めたてた。彼が非番のときは、まるで暇を持って余し気味の下男に下知するように、なにくれとなく家の雑用を言いつけるようになった。そのため、剣術の道場に通うのさえもはばかれるありさまだった。

が、苦しい所帯をやりくりしながら、黙々と家事をこなす気立てのよい嫁であった。茶道や華道にも秀でていた。こまごまと小言を言う姑にも口答え一つせず、けなげに仕えた。目を追うごとに、弥一郎の目にも以前の輝きが戻ってきたのである。平穏な年月が流れ、弥一郎は二十六歳になっていた。盂蘭盆が過ぎた日射しのきつい午後、先祖の墓参りをするようになった。

参るのは、例年通り、弥一郎夫婦と母のほかに、

ここに至って、弥一郎の夢は完全についていた。長年にわたって心に温めてきた計画が狂ってしまったのである。弥一郎は、その後二、三年の間、目的を失った者のみが持つうつろな目をし、どことなく物憂げで投げやりな雰囲気身をまとっていた。

そんな弥一郎が、山里を桜の花が彩る頃、組屋敷の同輩を頼って郷里から出てきた佳代という娘を見初めて、嫁にもらった。そのときから、彼の心に変化が現れはじめた。佳代はおとなしい

藤堂家の入り婿となつてゐる彦次郎とその嫁の予定であった。ところが出かけようとしてみると、藤堂家の中間が、奥様は隣家の茶会の招待を受けて都合がつかなくなりました、と知らせに來た。そればかりか、是非とも茶席に佳代を借り受けたい、との言葉を伝えてきたのである。

渋る佳代に、母は冷たく行くように命じた。弥一郎は不本意だったが、しぶしぶ承諾した。たださえ盆の間に参りたかつたのを、藤堂家の都合に合わせるように、と母にきつく言われ、や

むなく今日きょうに変かえていたという不ふ満まんが胸むねにある。

「それを、いまさら茶ちや会かいだなどと。それに佳か代よまでも……」

微び禄ろくながらも本ほん家けの跡あとを取とっている者ものとしては、愉快ゆかいな話はなしではない。

弥やい一いち郎ろうは、水みず桶おけと柄ひしやく杓さきを提よくそくげ、約やく束そくの刻こく限げんに墓ぼ地ちに着ついたが、彦ひこ次じ郎ろうの姿すがたはない。用よう意いしてきた雑ざう巾きんを水みずで絞しぼって、墓はかいし石いしを拭ふき始はじめた。細こまかい部分ぶぶんの汚よごれは、爪つめ先さきを使つかって丁てい寧ねいに除のぞいていく。

その作さき業ぎょうが終おわるころに、彦ひこ次じ郎ろうが若わか党とう二人ふたりを

伴ともい、肩かたをそびやかせてやってくるのが見みえた。

残ざん暑しよ敵てきしいとは言いえ、ブナ林ばやしの影かげになった墓ぼ石せきの周しゅう辺へんには、雑ざつ草そうがはびこっている。弥やい一いち郎ろうは屈かがみ込こみ、一いっ本ほん一いっ本ほん拔ぬきにかかった。丁てい寧ねいに根ねを残のこさないように拔ぬき取とったあと、土つちを払はらい落おとしてゆく。目めの片かた隅すみに、傍かたわらに立たって見み下おろしている母ははや弟おとうと、若わか党とうの足あしもとが見みえていた。下げ駄たや草そう履りの先さきが、真まっ直すぐにこちらを向むいている。罪ざい人にんの作さき業ぎょうを見み下おろしている刑けい吏りの履はき物もののような気きがした。〈いつもこうなのだ〉

弥やい一いち郎ろうの心こころに深ふかい翳かげりが生しやうじた。雑ざつ草そうを抜ぬくのは、どういいうわけか、いつも自じ分ぶんの役やく目めと決きま

っている。母ははや弟おとうとは、墓はかや墓ぼ地ちの汚よごれなど歯し牙がにもかけない様子ようすで、数じゆず珠ずを指ゆび先さきでもてあそび、仏ほとけの言葉ことばを唱となえるだけで事こと足たりたとしている。暗くらい気き持もちになった。

〈どうしていつも自分じぶんだけが……〉

弥やい一いち郎ろうは上じやう体たいを低ひくくして、ひたすら草くさを抜ぬき続つづけている。その姿すがたをあざ笑わらうかのように、母ははや若わか党とうと談だん笑しょうする彦ひこ次じ郎ろうの甲かんだか高こえい声こえが、頭あたまの上うえで

聞きこえている。弥やい一いち郎ろうは、雑ざつ草そうの生はえている方ほうへと、少すこしずつ身からだをずらしていった。

〈そう言えば、亡なき父ちちもよくこうして、何なにも言いわずに草くさを抜ぬいていた〉

弥やい一いち郎ろうは、父ちちの気き持もちが初はじめて分わかるような気きがした。胸むねの奥おくが痛いたんだ。しばらくすると、上うえから水みずが落おちてきて背せ中なかを濡ぬらした。顔かお色いろを変かえて見み上あげると、母ははが柄ひしやく杓さきで墓はかいし石いしに水みずをかけているところだった。

「わたしが陰かげにいますのですが……」

穏やかな調子で諭すと、そこにいるのが悪いのですよ、と突き放したような返事だった。若党が薄笑いを浮かべて見下ろしている。

弥一郎は、怒りと屈辱のあまり、目を反らせてうつむいた。滴り落ちた水が、土に黒々と染み込んでゆくのが見えた。握り締めた拳の中で、引き抜かれた雑草の束が小さく震えている。その背中に、今度は弟のかける柄杓の水が勢いよく跳ねた。続いて背後で、荒々しく数珠玉がぶつかり合う音が聞こえ、短い念仏の声がそれに続いた。

姿が消えた。嫁の佳代も、夫のあとを追うように、いつのまにか見えなくなった。

四

弥一郎と佳代は、それから数日とたたないうちに摂津に出ていた。六甲山麓近くの武庫川を渡ったあと歩を緩め、幾日かのちには播磨平野に現れた。

街道沿いで農作業をしていた百姓は、足を引かず気味に歩く、旅に不慣れそうな若い女と、

滴が背中から袖口を伝い、糸を引いて落ちていく。弥一郎は、うずくまったまま立ち上がる事ができない。胸が苦しかった。深い呼吸を幾つかして、気分が収まるのを待った。顔を上げると、墓地をあとにする母や弟たちの後ろ姿があった。手桶のそばには柄杓が投げ捨てられている。弥一郎は立ち上がり、袂の数珠をまさぐった。その夜、彼は、日が落ちて夕闇が訪れるまで、組屋敷には戻らなかった。

そんなことがあつてから三日後の朝、弥一郎のいたわりの声を掛けながら、その腕を取らんばかりにして先を急ぐ夫らしい男の姿を目に留めて、仕事の手を休め、腰を伸ばして微笑んだ。

あの墓参の日の夜遅く、弥一郎は、繕い物の内職を終えて寝間に入ってきた佳代を膝前に坐らせ、顔を近づけて、家を捨て初心にかえって剣で身を立てるべく技を磨きたい、と打ち明けた。行く先は、剣術の師が以前話したところのある姫路と決めている。

「甲斐性のない短慮な夫と笑われるだろうが、

おまえにこれ以上の苦勞をさせるわけにはいかない。気の毒だが離縁するから、実家に帰ってもらいたい」

それを聞くと佳代は、顔色も変えずにじつと弥一郎の顔を見ていたが、やがて低いながらもはつきりとした口調で言った。

「いつかそうおっしゃるのではないかと、思っております。私もそのほうがよいと思います」
大きく息を吸い込んだあと、佳代の表情が怒ったように険しくなった。

昼過ぎに、佳代が縫い物を届けるという口実で、風呂敷包みの旅装束を持って弥一郎のもとに駆けつけた。身繕いをしたのち、二人は手と手を携えるようにして保津川を渡り、遠く摂津に通じるという山道を登っていった。

最初は、脱藩者として追っ手を怖れて街道を避け、間道伝いに用心しながらの道行であった。関所を越えるときなど、家中の名と姓名を申し出るたびに冷や汗ものだったが、庶民と違い、通行手方の必要がない。さらに、亀山藩は、小なりといえど

「ですが、離縁はきっぱりお断りします。私もお供いたします」

そう言うてから、ほっとしたように微笑んだ。弥一郎の胸に熱い感情が込み上げてきた。苦勞をかけると分かっている、いまの彼にとって、佳代ほど頼りになる者はいない。弥一郎は妻を引き寄せた。

夫婦が刻を同じくしていなくなると、人目に立つ。翌朝、弥一郎は非番ながら所用があると言いき、家を出て、裏街道沿いの木賃宿に向かった。

あつても怪しまれなかった。
弥一郎の脱藩も、人を傷つけてのことではない。後々考えれば、追っ手の気配がなかったのは、家名に傷をつけまいと、藤堂家が穩便に取り計らうよう動いたのかもしれない。

「この辺りまで来れば大丈夫。ひとまず、姫路城下で落ち着こうではないか」
弥一郎は安堵の声を出した。夫婦の懐には、襟に縫い込んだ一枚の一分金を除けば、百枚ごとに

糸を通したびた銭が二束半残っているだけである。それだけでは、この先どんなに節約しても幾日も持たない。

〈今夜の宿代を除くと、いくら手もとに残るか……〉

弥一郎は不安になった。だが、金の苦労はあつても自由があつた。それも二人なればこそその喜びだど知っていた。それにしても暑い、と弥一郎は手の甲で額の汗を拭った。道の両脇には延々と水田が続いている。わずかに伸びた稲の上に、強い

日射しが容赦なく降り注いでいる。周囲は霞がかつたように、照り返しの中に浮かんでいた。

〈姫路城下まで行けば、何か仕事があるだろう。金を幾らか手にしたあとで、目当ての道場を探せばよい〉

懐具合の心配も多少は薄れて、足が我知らず速くなった。

〈それにしても暑い〉
歩きながら弥一郎は再び額の汗を拭った。
ところが、城下町が近づいた頃、佳代の様子が

おかしくなった。背後から聞こえてくる苦しそうな喘ぎを耳にして、弥一郎は振り返って驚いた。いつのまにか色白の顔から血の気が失せ、ひび割れた唇から浅くせわしない息が漏れている。

(以上2月4日放送分)